
『ゆめ』

遥風 覇鵠渡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ゆめ』

【Nコード】

N7835E

【作者名】

遥風 覇鵠渡

【あらすじ】

『僕』は……最近、変な夢に悩まされている。

ある朝、僕は山頂で目が覚めた。深い霧に包まれた……冷たい雲の、中に居た。

見下ろす限りの絶景は、見渡す限りの岩山だった。冷たい空気に身震いをして、僕は『夢』だと思い込んだ。

ある朝、僕は川辺に横たわっていた。ごつごつ石の……痛みで目が覚めたのだ。

川辺は澄んだ空気に満ちていて、ひんやりとした風が頭上の木陰を揺らしていく。

僕は何だか心地が良くて……せせらぎを子守唄に目を閉じた。

ある午後僕は風を見ていた。薔薇の溢れた何処かの庭で、白い椅子に腰掛けていた。白いテーブルには、ケーキが丸く置いてあって……『食べてください』と囁いていた。

僕は甘いモノが嫌いではないけれど、丁重に断って、紅茶だけをい

ただいた。

紅茶の澄んだ赤色を飲み干すと、途端に眠気に襲われた。僕は多少は抗いもしたが、甘い……緑の匂いの中で眠りについた。

ある午後僕は、和室に居た。畳の上で横になっていた。体の自由がきかなくて……金縛りにでもあっていたのだろう。

襖の向こうからは言い争っている様な声がした。僕はその幻聴が何故か恐ろしくて、耳を塞ぐかわりに意識を手放した。

ある黄昏時のこと。僕は真っ赤に染まった海に居た。暮れなずむ夕日が……暗い海に、よく映えている。

灰色の砂はまだ熱を覚えていて、僕は温かかったから涙を溢した。すると海の沖から人がやって来て、僕の前に貝殻を差し出した。

よくわからなかったが……涙を一粒落としてやるとその人は大い

に喜んだ。

『今晚は泊めて差し上げましょう』

その人が親切に笑うので、僕は言われるままに貝のベッドに潜り込んだ。

ある黄昏時。僕は神社の境内にいた。

夏の終わりの蝉時雨……鳥居の上に、立っていた。

流石の僕も、今度は焦った。夢ならば覚めてくれと、翼でも生えてきやしないかと。

すると翼が生えてきた。やはり願ってみるものだ。僕は、ぴよんと飛び上がり、山の向こうで焚かれている煙の方を目指した。

ある晩、僕は公園に居た。遊びに行った友達に追い出されたからだ。

月が蒼く……大きな夜で、僕はブランコをキィキィさせていた。

もう帰ろうかと立ち上がると、隣のブランコにも誰かがいた。誰かは首から下を失っていて、それでも器用にブランコを操っていた。

『ほう、器用ですな』

僕が感嘆の声を漏らすと、蒼い顔をした夢の住人は、灰色の瞳を細めて笑った。

ある晩僕は……冷たい土の上で、目を見開いていた。

無遠慮な懷中電灯がこの身を照らす中、ざくざくと土を削る音と、荒い二つの息遣いとを聞いていた。

胸から足から徐々に重たくなって……僕は綺麗に土の中へと隠される。

『これでなんとか………』

怯えたような男の声。

『ええ。崇らないでよね、貴方』

喜びを冷やした妻の声。

ああ、僕は死んだのだ。あの二人に……殺されたのだった。

そして今晚、僕は訪れる。湿った空気の我が家の寝室を。ベツ
ドの上では男女が眠っている。

さあどうやって引き裂いてやろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7835e/>

『ゆめ』

2011年1月16日04時37分発行